ぼくが猫語を話せるわけ

庄司 薫

中央公論社

ぼくが猫語を話せるわけ

庄司　薫

中央公論社

ぼくが猫語を話せるわけ　820円　©1978　検印廃止
昭和53年11月20日　初版　昭和53年12月25日　3版
著者　庄司　薫　発行者　高梨　茂　印刷所　三晃印刷

発行所　中央公論社　東京都中央区京橋2-8-7　電話(03)561-5921(代)

ぼくが猫語を話せるわけ　目次

ひげ　7
はじめに　10
——そもそもぼくは犬の飼主だった
I
猫語
長靴をはいた猫
レオナルド・ダ・ピッツィカート
化けて出る
犬派対猫派
古代エジプト語風

後頭部 47
Ⅱ
人類の運命はどうなる
食事
たばこ
袋叩き
ボースイタイ
望遠鏡
ジグソー・パズル
ぼくの天動説 87
Ⅲ
ネコフンジャッタ
「天才」がいっぱいだった頃
ハレム
大陸漂移説の夢
教育

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

定点観測
休日 119
Ⅳ
大風呂敷
縄張り
エプロン
台所回想記
公式写真
写真をとるのは難しい
不思議 157
Ⅴ
椅子
灰皿
鉛筆けずり
仲間外れ

精神衛生
ピアノ
囲碁
ぼくがゴルフの下手なわけ
夢の武器
Ⅵ
猫との散歩
珈琲をのみに行く
お巡りさん
競馬中継
柔かな乳母車
フットボール
脅迫
あとがき
——猫の時代

ぼくが猫語を話せるわけ

ひげ

ぼくは時々、この地球上に四十億以上の人間がいるということを思い出して、相当猛烈なショックを受けることがある。

ぼくはもともと、そういう「数にヨワイ」ようなところがあるらしいのだ。

たとえば、朝目覚めた時、ぼくはふと、この地球上に（時差はさておいて）四十億以上の、それぞれ異なった目覚めがあることを思いつく。それも、その一人一人が毎朝（そして昼寝なども考えれば、これは大変だが）ちがった目覚め方をしているということ……。

ぼくはそれから、まあたいていはひげをそることになる。

ぼくのひげは、これは一本一本が相当に太

くてかつ硬い。のばしっ放しにしておくと、口のまわりと、もみあげからあごにかけて、かなり精悍な感じ（と自分では思うんだ）にはえてきて、そのうち暇になったら本格的にのばしてカッコよく周囲をヘイゲイしてやろうなどという毎朝の夢を生むことになる。

ところで、実際問題としてこのひげをそるということは、特にいそがしい時には大変わずらわしいことだ。睡眠不足が重なってきたりすると、肌が荒れてきて、思うようにそれない。

いろいろやったあげく、ぼくは結局シックの片刃の安全カミソリならびにブラウンの電気カミソリを使っているが、そこにおちつくまでには、厖大なひげそり道具のコレクションができあがった。詩的に言うならば、その道具の一つ一つに、さまざまなぼくのそりおとしたひげの記憶、ぼくの朝（そして、ぼく

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

は夕方にも二度目のひげそりをやることがある）の記憶がある。大変だ。

ところで、今朝のひげのそり具合はどうだろう。おそるおそるとりかかりながら、一種の健康診断をやるような感じになる。

まあまあ、となっても、あわててはいけない、というのが、「この道」二十余年の「生活の知恵」というものらしい。そして考えてみれば、このひげをそるという単純な事柄をめぐって、この地球上には何十億という「生活の知恵」があり、道具への見解があり、健康診断があり、男の朝の記憶がある、なんてわけだ。

やれやれ、でもまあ、今日は相当いい感じだった。

はじめに

——そもそもぼくは犬の飼主だった——

或る日ぼくは、主観的には全く突然に、一匹の猫の居候を抱えこむことになった。

これは一大事だった。

そもそもぼくは犬の飼主だった。小学校四年生から十三年間、ぼくは一匹の犬を大切に飼っていた。とてもいい奴だった。

この犬のことを思い出す時、ぼくの中には或る柔かく懐しい何かが溢れるように目覚める。率直に言って感傷的と呼ばざるを得ないような何かが甘く渦巻いたりして、ぼくを狼狽させる。

ほんとにいい奴だった……。あいつについてこれ以上話そうとすると、ぼくはきっと何冊も本を書かなくてはならないだろう。いずれにしてもぼくは、彼に死なれた時、こんな思いをする位なら二度と生き物は飼うまいと心に決めたものだった。

その後ぼくは「バクの飼主」めざして暮すことになった。

人間の眠りの平安を守るために、ひたすらその悪夢を食べるというバク……。ぼくは、その種の健気なバクをぼくのうちに育てようと張切ってみたわけだが、その結果、そんな具合に張切った時すべての男子がするように、ぼくもその生活の基本に一種のストイシズムをおまじないよろしく持ちこんだ。

つまりは、どうでもいいことからは逃げて逃げて逃げまくれ。この「非常時」に、犬・猫の類いなどにかまけていてなるものか！

ところが世の中には成行き、または行きがかりとでも言う他ないようなものがゴロゴロしていて出会い頭の事故をもたらす。或る日ぼくは、繰返すけれど主観的には全く突然に、極端に旅行がちの友達の猫をちょっとばかし預る羽目に陥ったのだった。

でもまあ、なんといっても自分の猫じゃないし、ちょっと預っただけなんだから……。自分が飼主なら、ちゃんとしつけもしなくてはいけないだろうし、そのためには怖い顔をして厳格に叱ったりする必要も出てくる。でも、他人の猫ならかまうことはない。悪いところはみんな本来の飼主の責任であって、ぼくはただ「いい顔」をして甘やかしてやればいい、ということになる。

ちょうど、甥とか姪とか、或いは知り合いのうちの子供たちに対して「いいオジサン」になるのが簡単にしてかつ快適なのと同じわけだ。

問題の居候は、体重七・五キログラムという巨大な八歳になる牡のシャム猫だったが、シャム猫というよりは、立てばフクロウ坐ればタヌキ歩く姿は牝ライオン、といった感じの堂々たる、しかしなんとなく変てこなシロモノだった。

彼は、エリザベス・テイラーまたはモハメッド・アリの旅行よろしく、車いっぱいの引越荷物を従えてやってきたが、その引越荷物の内容は、巨大なトイレット一式ならびにトイレ用砂数袋、食器三点セット、「リトル・フリスキー・カントリー・チクン・フレイヴァー」なるキャット・フードのカンヅメ並びに袋入りビスケット一山、そしてカミュのナポレオン一本だった（このコニャックは、ぼくへの「手みやげ」であることがやがて判明してぼくをホッとさせた）。

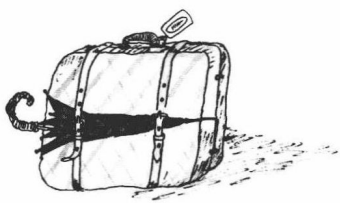
彼は、ぼくのうちに入るや否や、まずわがヴェランダで日向ぼっこしていた鳩たちの一連隊を猛烈な勢いで追っ払い、それから悠々とぼくのところに歩いてきて、どうだ、という顔をした。そしてぼくが、ま、いいだろう、と呟くと、話がついた、とでもいうようにうなずいてみせた。

それから実を言うともう五年たつわけだ。そして結論を言うと、その問題の居候は何故かいま

だにわが家に住みついていて、たいていのところぼくの周囲一メートル位のところで眠っている。そうして、これまた何故か、その猫の本来の飼主までうちに住みついている。彼女は（その本来の飼主は女性だったわけだ）、預けた猫が心配でしょっ中様子を見にきていたのだが、いちいち通うのが面倒くさくなったのか、いつの間にか「住みこみ」になってしまったのだ（そして猫だけでなく、ぼくの面倒まで見ているつもりらしい）。

いずれにしても、かくしてぼくは再び生き物などを飼って五年たった。肝心のバクの方の運命が気がかりでたまらないけれど、一日十八時間は確実に眠っていて、なおなんら悔むところなく悠々としている猫を見ると、ま、いいか、という気もしてくる。

もちろん、まさにこのあたりが問題なのではあるらしいが……。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co